

## 白熱教室入門

越谷北高等学校長 下山忍

7月29日に早稲田大学国際会議場で開催された「白熱教室入門—高校生のための対話型講義」を参観してきました。本校からは、地歴科の藤澤先生引率のもとに、1・2年生の男女7名が参加しました。雨の降る中、大隈重信銅像前で集合して会場まで来たとのことでした。埼玉県教育委員会が主催し、今回で3回目になるそうです。当日は約300名の高校生が集まり、熱心に討議しました。

さて、この「白熱教室」とは、以前にNHKテレビでも放送されたように、アメリカ合衆国ハーバード大学のマイケル・サンデル教授によるものが有名です。7月29日は、サンデル教授とも交流の深い、千葉大学の小林正弥教授による「これからの生き方を考える（公共に私たちはどう関わるか）」という対話型講義でした。対話型講義とは、講師が受講者と対話をしながら進める講義形式で、答えが出せないような問題について深く議論するものです。

当日は「校則は必要か」という問いかけに始まりました。以後、壇上のパワーポイントに写し出された様々な問いかけに対して、参加している高校生全員が賛成か反対か（3つ以上の選択肢の場合はどれか）について、挙手をしたり、色別のカードを挙げたりして、自分の考えを明示しました。その内容は、すぐに結論が出るというよりも考え込まざるを得ないような例が多かったようです。

そして、次に、小林教授はその理由の説明を求めます。誰が答えてもよいし、答えなくてもよいのですが、会場の高中生はみな積極的に挙手をしていました。小林教授はなるべく多くの高校生が発言できるように配慮して指名し、ある高校生が意見を言うと、小林教授はそれを簡単にまとめてそれに対する反対意見や賛成意見を募ります。時には発言者を立たせたままにして、その場で異なる意見への反論をさせたり、さらに再反論させたりすることもありました。相手の意見に耳を傾けるとともに、自分の考えを理由付けしながら発言することにより、思考力・判断力・表現力を鍛えているのだと思いました。

今回の参観を通して私が考えたことは、生徒の主体的な学習ということです。「白熱教室・対話型講義」は、一斉講義とは異なり、受講者（高校生たち）が自ら進んで発言しなければならない状況を否応なく作り出すものです。そして、高校生たちは自ら進んで発言することで、思考を深めていました。これは、本校も参加している「未来を拓く学び推進事業」の協調学習（ジグソー法）にも共通しますが、主体的な学習方法によって伸ばせる能力があります。対話型講義や協調学習を毎日の授業で行うわけにはいかないと思いますが、こうした実践から学ぶことで、一斉講義型の授業にも主体的な学習方法を取り入れる工夫はあるのだろうと思っています。